

水と共に暮らすことの意味

福廣 勝介 *Written by Shosuke Fukuhiro*

はじめに

川好きの僕は、本誌から「川の話」の原稿依頼をいただいて、気軽に引き受けておいて、それ以降、原稿締め切り直前まで「川の全国シンポジウム 淀川からの発信」(08年11月2・3日、京大時計台ホールにて)の開催準備におおわらわだった。締め切り間際、一気呵成にと思っ、よくお題を眺めてみると、「川」ではなく、「水と共に暮らすことの意味」である。一瞬凍ったけれど、もう仕方ない、川に流れているのは水と聞き直って、川に重きを置いて書かせていただく。

水の惑星で暮らし、自らの身体も大部分が水分である我々と水との親和性はきわめて高い。身体は水よりもわずかに軽いため、水に浮くことで、気軽に川やプールに泳ぎに行けるし、水分も飲み込みやすいのだろう。そして何よりも、石油はなくとも生きられるが、生命を育む水はなければ生きていけない。今、普通の人には水と聞くと、蛇口から出てくる水を思うのだろうが、水の形はさまざまである。「水と共に暮らす」からの連想も、皆さん、さまざまであろう。近い人に「水と共に暮らす」から、何を連想するかを問えば、「井戸」と答えが返ってきた。僕は「川」であるが、決して川の専門家ではない。川と水路網の町、三重・伊賀名張で生まれ育って、ずっと、川であり、堀割をそばで眺めてきた一住民としての意見である。

まずは、井戸と川あたりから、僕の水想いを書いてみたい。

井戸の「こ」と

子どもの頃、外で遊んでいて、近くの友達の家飛び込んで、「おばちゃん、水飲ませて」と言っ、よく井戸水を汲ませてもらったものだ。あのおばちゃんへの断りとお礼は、本当は誰に對して言っていたのだろうか？ おばちゃんの井戸水への許可？ ポンプ使用の許可？ 水の神への許可だったのだろうか？

滾々こんこんと水の湧く井戸は、流域という面の中の点である。井戸の底はどこに繋がっているのだろうか？ まさかブラジルには繋がってはいないのだろうか？ 繋がっている一面が流域なのだろう。流域一面の流れの中で、わが暮らす



高島市新旭町の川端(かばた)

その地にオンサイトで井戸のようにして供給されていた水。どのエリアをもってオンサイト、オフサイトというのか、その定義は難しいが、我々はかつて近くの水を汲み、近くに流していた。

流域の水、水のDNA

流域の地形、気象、生態系の掌(天)の上で、我々は自由に水を手に入れてきた。そして、自らが天の一部として水を流してきた。まさに「湯水のごとく使ってきたのである。湯水のごとく使いながらも、水循環の素直な世界・社会であった。地の物は美味しい。それら野菜や他の

食物も美味しい水循環の故である。健康な美味しい人間も美味しい水の流れる地から生まれる。地の者である。水が廻る、素直に受け取る、静かに返す暮らしである。そうした素直な循環の中では、流域で養える人口には限度がある。その人口を養うためには、節度ある作法と技術が必要である。節水 恩水 謝水。節度ある水や川との付き合いである。しかし、いつの間にかパイプのライフラインになってしまった。このパイプ化を文明の尺度にしてきた近代。いつしか、水の源と行く末は、遠くなり、日々の暮らしから実感がなくなり、誰か他人に任すようになってきた。都会では、環境への関心の高い人たちの集まりでも、自宅の蛇口の上流はどこからやってきて、台所シンクやトイレの排水が、どこに流れて、どんな処理で放流されているのかを知っている

人は少ない。まあ無責任で呑気なのはいいが、社会の信頼が崩れてきて、約束や契約が文書でしかできない時代になって、お隣が流した水が不安で使えなくなってきたのである。

ある漫談家が言っていた。大人になるというのは、他人に「ありがとう」と「すみません」の挨拶ができることだ。自然に対しても、「ありがとう」と「すみません」を言えることではないだろうか。「近くの山の木で家を建てる宣言」というのがあった。それにちなんで、「近くの水を汲み、近くの地面に排水する宣言」というのはいかがだろうか。

しかし、どうだろう。地酒の大好きな関西のある経済学者が言っていた。「雪国からパイプラインで水を引けば、関西も節水を叫ばなくともよくなる」である。地酒の水はこの水でもいいのだろうか？ 昔、信濃川の水を、流域を越えて東京の人の飲み水にすることになって、新潟の知事が言ったという。「東京の人がこちらに来て住めばいい」と。上流も下流も遠くだった社会である。水に、流域DNAはないのだろうか？

川のこと

川は自然界での水の形であり、表現である。その水は、ほとんどの場合が液体で、しかも自然エネルギーで動いている。日本では川は自然の代表・象徴であろう。そして、どの地に立つ

てみても、わが足の下は川であり、流域である。日本人、どなたにも「Myリバー」がある。

「山・川」は、伊賀忍びの合言葉であったようだが、裏返しでの対句ではなく、実は、イコール同じものであったのである。川とは、地表に見える水流の線だけでなく、山も含めた面、流域である。そして人の営為も含めての地域自然である。その川、はたして誰のものなのか？ そしてその自然を、どこまで人工で扱えるか？

素人・庶民が関われるのか？ その扱い方、その合意の方法は？ こんなことが平成9年に河川法が改正されて以降、各地での議論となっている。川は、従来の利水・治水という単目的から、生態系などの事も含めて総合的環境や住民参加という課題を持つようになったのである。

川の自己紹介

川好きにとって地元名張の川は、いまや大変な事態となっている。約10年前、ダムのなかつた名張川本流、町のちよつと上流に比奈知ダムができた。それ以降、名張周辺の川景色は激変した。川で遊べる所がない。道路から水流にアクセスできる石・砂の川原がない、ツルヨシばかりである。水が少なくて、泳げる淵がない。河童の棲む暗い淵がない。石の下の魚を手掴みしようとする石に角がある。もちろん、青年が泳ぐ景色はない。名張には、もう川はないのである。僕の川の喪失感である。伊勢湾台風で

床上浸水を経験した僕が、そう思うのである。
そして同じ頃、近畿各地での「自然環境復元」をテーマにしたいくつかのシンポジウムの準備を共にした仲間たちと「NPO法人近畿水の塾」を設立して、以来代表をさせてもらっている。設立趣旨はHPをご覧になって欲しい。

上流のこと、下流のこと、 そして「限界都市」

人は、元々、水が容易にとれる所で、しかも洪水の少ない水辺に集まって住んできた。生き物の生命の縁である水のほとりには、人も生き物も豊富に集まってくる。生き物の生命を頂戴してわが生命を守ってきた人間は、水辺で食糧を生産してきた。その地の自然に対するインパクトで生産しようとするのである。もちろん、他の生物の側・自然の側からの反発がある。その折り合う点を求めるのが、人間主人公の環境問題である。技術でいえば、農業土木などは、長い時間の試行錯誤の結果で到達した代表的技術であろう。そうした技術を使って、上中下流それぞれの適地に満遍なく住んできた。その地の先住民の暮らしである。

ところがどうだろう。近年は、生産と縁を切った、自然との折り合いを意識しない下流で、人間だけで暮らしはじめた。そこでは当然のように、利水・治水課題が出てくる。そして、その課題を上流で操作しようとしている。上流が得るもの

は何か？ ダムは下流の大都市のためではないか。下流域の大都市では、利水・治水はもちろん食糧を含め、大きな意味での環境課題に対し自前で自立ができないのである。オンサイト自前で調達できない食糧を、道路網とあるいは海上輸送網というライフラインで届けるというのである。食糧ライフライン！ 僕らはいつか、張り巡らされた管・チューブから、点滴で食を摂取するようになるかもしれない。もちろん僕はアルコール入りチューブ接続なので高価なのだが…。「限界集落」ならぬ「限界都市」である。

下流は、上流で生産された生活材や珍しい物が流れ着いて、市の立った所であった。しかし、今の市場は、生産者をさしおいて、どうにも傲慢なようである。なくてもいいような物や、生産物ならぬ権利の売買までしている。「先住民」を追い出して、のうのうと、水も食糧も正しく湯水の如き消費で稼ぐ大国の論理のようである。

そして、上・中流の元「先住民」がそうした下流に移住しているというところが問題を複雑にしている。「人よ、上流に戻れ！ 戻れる暮らしを！」である。

名張・「はないかだ」

中流のわが町・名張には「築瀬水路」という江戸時代初期に掘り割られた素晴らしい水路網がある。その水路は町の生活用水・防火用水であり、排水路であった。つまり、上水道であ



名張の「はないかだ」

り下水道であった。それだけでなく、もちろん、農業用水でもあった。そしてまた開渠なので、子どもが生き物と出会う素晴らしい遊び場であり、大人にとっては、眺めて心癒される環境用水でもあった。パイプラインでない上下の関係であったから、上下流相互の家・地域への配慮、作法も行き届く文化用水でもあった。総合水道であった。それは遠い昔のことではない。まだほんの50年ばかり前、僕の子ども頃までそうであった。鍋釜洗い、風呂の水汲み、魚とり、急流での鮎（たらい）乗り。堰が落とされた日には、学校を休んでの魚とりである。何十というホタルが舞っていた。名張は大川（名張川のこと）と共に、そこから引かれた水路（僕らは川と呼んで

いる)によって大きく発展した町であった。

それがいつの間にか、各所で水路に蓋がされ、暗渠になり、道路となり、駐車場となり、町中では水流を見られる所は、ごく一部となったのである。最近の環境ブームで、見た目の水質は少し良くなってきたようだが、住んでいるのはアメリカザリガニだけになってしまった。そして水質改善だといって行政は、財政難をものともせず、公共下水道事業導入である。人工で作ったものは必ず手入れをし、何時かは壊し作り換えなければいけない。しかも大金を使えば使うだけ、今後も、大きなお金が必要になる。その長期のメンテナンスのイメージもなく、公共下水道事業は始まった。名張には、既に築瀬水路という素晴らしい総合公共水道があるのである。こつしたことは、何もわが町に限ったことではない。全国各地で起こっている。そのことに抵抗する先駆者であったのが、僕の川と酒の師匠でもある九州・柳川の(故)広松伝さん。その映画「柳川掘割物語」の冒頭の語りは、「日本が貧しかった頃、どの村にも小川が流れていた。春の小川は、さらさらと行き、岸にはすみれやれんげの花、子どもはコブナを釣り、夏のホタルを追って遊んだ。(中略)日本が貧しかった頃、手の届く所に水辺があった」である。

地元長老の発案で、僕ら「川の会・名張」は、「はないかだ」を浮かべることにしたのである。ハナシヨウフを、花の季節2〜3週の間、手作りいかだの上に植え込んで、掘割水路に浮かべるといふものである。町の人、町行く人々の視線を、今一度、水路に向けてもらおうというも

のである。そして、川・水路の存在を再認識して、川との濃密な付き合いのあったこの町の、キラリと光った時代を思い出ししてもらおうというものである。来年で19年目になるが、はたしてどうか、どれほどの効果もまだ現れてない。生き物はザリガニだけであるし、行政は公共下水道事業である。ただし、季節の風物詩と呼ばれるようになり、名張郊外のニュータウンの人たちの中にも、そこが、名張の顔・ヘソと思ってくれる人が現れたのは嬉しいことである。

「川の日ワークショップ」のこと

東京に事務局のある「全国水環境交流会」がお世話をしてくれている。全国の民・官の、「いい川作り」の発表会、表彰会である。今年で11年目、スタイル一新ということで、今年から「いい川・いい川作りワークショップ」と名称を変更したが、毎年、100近い団体・個人が応募してくる会である。当初は、内容よりも発表パフォーマンスのお祭り騒ぎの会、との批判もあったが、会の継続で、表彰されたプロジェクトを中心に流域的に広がり、同じ地区ながら、違うプロジェクトでの継続、世代間への広がりが見られるようになった。そして、韓国への波及、定着。国民的、国際的な川テーマでの地域づくり。文化運動の予兆がある。

この「川の日ワークショップ」の継続や冒頭の「川の全国シンポジウム」の開催といったよ

うな市民住民サイドの動きが、わずかずつではあるが、水、川を取り巻く状況の何かを変えようとしているように思える。

あとがき

水と共に暮らす、あるいは水の世界に暮らすといった方がいいのかもしれないが、その意味に僕なりのいくつかのアクセスを試してみたが、水は生命すべての根源であるが故に総合である。逆には、どの断片からも思い寄れる科学であり文化である。日々の暮らしから思うと、国の組織も「生命省、水局、川部」であって欲しい。そして、師匠の広松伝さんは言った、「酔い覚めの朝の水ほど美味しいものはない」。環境と環境の主人公共に健全なればこそその言葉だと思っている。環境課題は直接民主主義で、とも思ったりもする。我々、一人ひとりが、その健全さに向けて、少しでも参加していきたいものである。

福廣 勝介(ふくひろ・しょうすけ)

NPPO法人近畿水の塾 代表理事、川の会・名張代表、NPPO法人「全国水環境交流会」理事。日本住宅公団(住宅都市整備公団を経て現・(独)都市再生機構)に入社、主に集合住宅の屋外の計画設計業務に従事。現在の給金は(財)住宅管理協会関西支部からもらっている。